

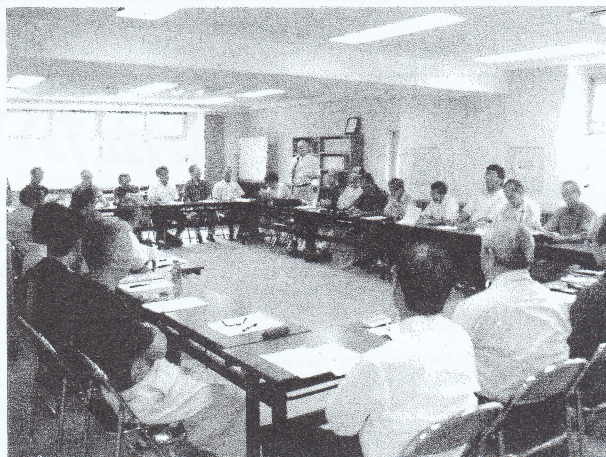


「男らしさ」から「自分らしさ」へ

～会社人間から生活人間になるために～

初めての男性向け講座「男の生き方セミナー」(9/25～11/20)は、予想を超える反響に定員を増やして行いました。家事としての男の手料理研究家・吉田清彦さんは、「一所懸命頑張ってきた結果が、リストラや自殺ではあまりにもつらい。もっと力を抜いて、楽しく生きる考え方に方向転換しないと、損」と、男性たちに「力を抜いて生きようよ」とメッセージを送り続けています。

「今回参加された方は30代が3人、50代が14人、60代が17人です。40代が一人もいません。30～40代は残業が一番多く、リストラで残った人たちが死に物狂いというよりも死にかけるといえるほど働いている世代です。50代は、定年退職を視野に入れて、仕事を少し犠牲にしても、そろそろ生き方を考えてみようとする世代かもしれません。60代は退職されたあと、今までの会社人間では家庭でも地域でも居場所がないと思い始めた世代です」と始まった吉田さんのお話を聞いて、参加者から「これからの人生をどう生きるか方向性が見えた」と感想が寄せられています。



＝男女共同参画社会の幕開け＝



男女共同参画には大きな流れが二つあります。一つは男性中心の社会で、差別されていた女性たちが声を上げ始めたことです。戦前から婦人解放運動はありましたが、世界的に大きな流れとなったのは、世界女性会議が開かれた1975年です。

男性が外で働いて収入を得、女性は家内・無償労働で家事・育児・介護という性別役割分業がきれいに真つ二つにわかれたのは、比較的最近のことです。それまでは第一次・第二次産業など農業や林業、商売人は当然男女ともに働き、男と女の役割はそんなに判然とはされてなく、地域的なばらつきもありました。1975年頃になると、近代的な都市労働者が増え、専業主婦が一時的に多数派になりました。政府などが専業主婦のいる世帯を指して「標準世帯」と言うようになったのもこのころで、男らしさ・女らしさといった性別役割意識・性別特性が強調されるようにもなりました。

ところが、よく周りを見回してみると、男でも女でもたくましい人もいればたくましくない人もいます。責任感がある・ないは、男性・女性の特性ではなく、地位が与え、つくるものです。周囲の期待値が高ければ、それにあわせて人間は変わります。男性だから、女性だからではなくて、置かれた位置によって変わるのです。女性差別の根っこに性別役割分業があることに気づいた女性たちの声が少しずつ大きくなってきたのも、1980年代からです。

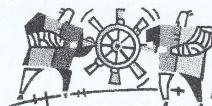
＝男女共同参画社会を促す社会的背景＝

男女共同参画社会基本法は1999年6月にできました。しかし、女と男の枠組みを大きく変えようという、この法律が成立したことを知っている人はほとんどいません。男性は自分の生活に関係ないと思っています。

この法案が参議院を通過した前後1週間近く、厚生省(現:厚生労働省)はテレビや新聞等で、赤ちゃんを抱いた男性のポスターで「育児をしない男を、父とは呼ばない」と大々的に宣伝しました。「結婚や子育てに夢を持てる社会を(つくりましょう)」と書いてあります。つまり、1999年3月の段階で、日本は「結婚や子育てに夢の持てない社会だった」ということです。

今、日本の子どもの数は急激に減っています。2003年の出生率は1.29です。一人と一人が結婚して二人の子どもが生まれれば、人口は減りません。世界的には人口が増えすぎているので、徐々にゆるやかに減っていくのが理想的、出生率は1.8ぐらいあればいいと言われていました。戦前までは4～5、70年代前半までは2を維持していたのに、1989年に1.57ショックがありました。現在、1億2千700万人の人口は、再来年がピークで、2050年には1億人を割ります。2100年にちょうど半分になります。半減すれば人口密度が下がって住みやすくなるわけではなく、高齢者ばかりで若者が少ない社会になります。1.8はムリとしても、1.5から1.6～7ぐらいまで回復させないと、税制も社会保障制度も成り立たなくなります。

1998年の厚生白書は従来の性別役割分業社会では日本は衰弱し、たちゆかなくなるので、社会全体を変えてゆこうと書いています。夫が家のことを考えずに働く日本型雇用は、妻の負担となって、女性が結婚をしない、子どもも一人でやめてしまおうと指摘しています。日本がある程度ゆるやかな成長を続けるためには、子どもを産みやすいではなく、子どもを育てやすい環境を、地域が、企業が、国が支える社会にする必要があります。



＝熟年離婚が増えるわけ＝

男女共同参画社会基本法が通った年の8月に日本経済新

聞生活家庭面に、「自分らしい余生、夫は不要」という記事が
 でした。98年の人口動態統計によると、97年の離婚件数は
 24万件。80年代まではおおむね結婚80万件、離婚20万
 件でしたが、90年代には結婚75万件、離婚25万件とい
 う数字に変わりました。今は結婚75万件、離婚30万
 件で約2.5組に1組が離婚しています。特に同居期間が
 20年を超える、いわゆる熟年離婚が約4万件、前年比
 13%増。同居期間が30～35年では約5千件と前年
 比20%増。35年以上になると約3千件と26.9%
 増です。結婚期間が長いほど、離婚する人が増えてい
 ます。

給料が振込制度になり、夫は一所懸命働き、妻は毎月、預
 金通帳を見る楽しみを得ました。ところが、妻に家や子ども
 のことを預け、家族のためと頑張る男性ほど家にいません。平日
 の夜は遅く、土・日もいない。夫のいない家で、妻と子ども
 の平和な生活が保たれています。しかし、定年退職の日を境に、
 通帳には何も振り込まれなくなり、横を見ると、夫がごろごろ
 しています。その頃には子どもは社会人になって家をでてい
 るので、夫婦二人だけになります。妻の方は地域の中で自分
 のネットワークをもって、グルメや観劇や地域の活動など
 で忙しい。「出かけてきます」と言うと、夫が「オレの飯は？」
 ということになり、何もできない夫がわずらわしくなります。

女性の平均寿命は85歳です。夫が60歳とすると、妻は少し
 若くて55歳ぐらい。妻は自分の人生があと30年もあると考
 えた時に、充実した自分らしい余生を過ごしたいと思いま
 す。そこで「夫は不要」とならないためには、50代から少し
 ずつ、いて欲しいと思われる夫になる努力が必要です。妻が
 それまで地域社会の中で培ってきた人間関係を肯定しながら、
 夫は夫で自分の居場所を、家庭の中でも地域の中でもつく
 っていくことが大事です。

60歳以上の人が考え方を考えるのは大変難しいと思いま
 す。次の世代はどんどん変わってきています。たとえば、「夫

は外で働き、妻は家を守る」という固定的役割分担の支持率
 は、72年には男女ともに8割を超えていたのが、02年には男
 性51%、女性43%と低下していて、20代、30代の男性の
 支持率は4割台になっています。また、女性が仕事を持つこと
 に対する男性の意識も、「子どもができてみずっと職業を
 続ける」と答えた「共働き派」は、92年は20%だったのが、
 02年には37%にまで増えてきています。



＝仕事以外の何かする場所を持つ＝

過労死・自殺する男性が急増しています。この5年間で合
 計20万人近い人が自殺しています。7割が男性です。トップ
 は50代、続いて60代、40代となっていて、働き盛りの男性
 たちが自ら命を絶っています。神戸の震災のあと、仮設住宅
 での孤独死が問題になりましたが、同様のことが起こって
 います。

生活自立ができない、周りとの人間関係が持てない、料理
 ができない、弱音をはかない、信号を発しないで頑張る。そ
 ういった男性たちが亡くなっています。しんどいときにはしん
 どいと言いましょ。定年からは遅すぎます。早めに自分のセ
 ーフティネットワークは自分で作りましょ。

人間には3大欲望があつて、性欲・食欲・睡眠欲の三つがな
 いと生きていけないと言われてきました。しかし、それは動物
 のこと、人間にはプラスアルファが必要です。キーワードは
 人間関係欲望です。これまでは出世欲・名誉欲と言われま
 した。ところが、出世欲・名誉欲は一部の人しか獲得できま
 せん。大切なのは、横につながる人間関係欲望です。人から
 必要とされ、期待されることによって、人は生きていけま
 す。

夫が定年退職して、これから妻孝行しようと思った途端に、
 妻が頭をさげて、「お父さん、ご苦労様でした」とねぎらい、
 その後、「この際、私も妻を定年にさせて」とならないよう
 にしましょ。時代が大きく変わってきていることを前提に、
 自分で生きやすいように選択していかせてください。（まとめ 田中きょうこ）

☆吉田さんおすすめ☆ ジェンダーチェックをしましょ



変革へのキーワード

- ①「男の活券(こけん)」を捨てよう!
- ②「男らしさ」から「自分らしさ」へ!
- ③「会社人間」から「生活人間」に!
- ④男はもっと生活力を、女性はもっと経済力を!
- ⑤仕事と家庭の両立ができる働き方を!

ジェンダーとは普通に思い込んでいる男らしさ・女らしさです。あまり真剣に考えないで、自分が今どう思っているかを「はい」「いいえ」で答えてください。「はい」が多い人は、従来の価値観を当たり前として、何も不思議と思わずに思い込んでいたわけですから、ゆるやかに考え方を改めていく必要があります。「はい」が0の人は従来の価値観にあまり縛られずにのびのびと生きてきた男女共同参画型人間です。6～10の人はちょっと危ない・努力が必要型人間です。11以上ついた人は自分がこれまで信じてきたことが、これからの社会では障害物になります。妻は社会の新しい変化に適応していますが、夫は会社人間で、全然気がつかない。退職したら途端に熟年離婚にならないように柔軟になる必要があります。

1. 朝、妻は夫より早く起きるほうがよい。
2. 妻は夫の家の墓に入るものだ。
3. 家事育児は主婦の役割である。
4. 夫を「主人」と呼ぶのは当然だ。
5. 妻子を養うのは男の甲斐性である。
6. デートの費用はいつも男性がもつものだ。
7. 男は苦しくても弱音を吐いてはいけない。
8. 女の子が成績がいいと、つい「この子が男の子だったら」と思う。
9. 男の子より女の子の言葉づかみが気になる。
10. 父親はいざという時だけ育児に登場すればいい。
11. 子どもが3歳までは母親が育てたほうがよい。
12. 子どもが小さいうちは母親は外で働かないほうがよい。
13. 女性が外で働くのは構わないが、家事がおろそかになるのは好ましくない。
14. 夫が転勤の時は、妻が退職してついていくべきだ。
15. 親が倒れたら、女性が退職して看病すべきだ。

